

平成30年度  
入学試験問題  
(第1回一般入試)

# 国語



立正大学付属  
立正高等学校

三

問一

(ア)

(イ)

(ウ)

んだ  
(エ)

(オ)

Vertical answer box for question 1, containing labels (ア), (イ), (ウ), (エ), (オ).

問二

A

B

C

D

E

問三

(a)

(b)

(c)

(d)

Vertical answer box for question 2, containing labels A, B, C, D, E, (a), (b), (c), (d).

問四

Large empty vertical answer box for question 4.

問五

1

2  
初め

3

終わり

Vertical answer box for question 5, containing labels 1, 2, 3, 終わり.

問六

I

II

問七

Vertical answer box for question 6, containing labels I, II, 問七.

問八

Large empty vertical answer box for question 8.

問九

Vertical answer box for question 9.

問十

Small square box for question 10.

三

問一

(a)

(b)

(c)

(d)

Vertical answer box for question 1, containing labels (a), (b), (c), (d).

問二

(1)

(2)

問三

Vertical answer box for question 2, containing labels (1), (2), 問三.

問四

Vertical answer box for question 4.

問五

Small square box for question 5.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

Small square box at the bottom left.

平成三十一年度 立正大学付属立正高等学校入学試験問題 国語(第一回)〔解答用紙〕

受験番号

氏名

※得点

【一】 問一

(ア) (イ) (ウ) (エ) (オ)

問二

1 品詞名 2

問三

A B C

問四

② ⑦

問五

[Blank area for question 5]

問六

[Blank area for question 6]

。に。

問七

[Blank area for question 7]

問八

[Blank area for question 8]

問九

[Blank area for question 9]

問十

[Blank area for question 10]

問十一

[Blank area for question 11]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

問題の都合上、本文を齎しているところがあります。

【一】次の文章を読んで、後の問に答えよ。(※問題中の字數制限は、すべて句読点・記号等も一字とする。)

さて、「大貧民ゲーム」の話に戻りましょう。小学生だから「社会」の経験<sup>④</sup>がないので、「大貧民ゲーム」を社会とみだてて、そこでどういうことが起こっているかを考えよう、という話でした。もちろんそれは、実際の社会とはぜんぜん違っている。  
 [ A ]、大事なのは、これ自体が一つの面白いゲームなので、ゲームの本質が何であるかはそれなりに取り出せるということですね。  
 [ B ]、そこからゲームと社会の類似点についても、多少考えることができます。

そつき、このゲームでは、貧民も努力したいでお金持ちになれるという点で、昔の王様のいる社会とは違うと言いました。それは近代社会の大事な特質です。昔の社会をゲームにすれば、ゲームは階層別に別れるでしょう。上位の王侯では権力闘争のゲームがある。下のほうにゆくほど、流動性がなく、身分が固定してくる。社会的に上昇するのはますますコンナンになる。なぜそういう違いがあるのか。

このことは、近代社会の基本の仕組みにかかわっていて、社会科学でまず考えなくてはいけない大事な点です。

王侯が支配する社会と近代社会の大きな違いは何でしょう。一般的には、近代社会とくに民主主義の社会では、人間は「生まれつき自由で平等」。だからそこで自由や平等が認められているのだ、と言われます。しかし哲学的には、この理解は大事な点を見落としている。

われわれ一人一人が自由で平等だということを、誰が認めているのでしょうか。神様？ それとも、政府？ どちらもありません。また誰か特別な人がそれを認めているのではない。重要なのは、近代社会では、人々が他人の自由と平等を、お互いに認め合っている、ということ。つまり「自由」を相互に承認している、ということです。

これは社会をゲームだと考えるととてもよく分かります。いま何人かの人がみなでゲームをはじめようとします。するといくつかのことをはじめの前提として認めあう必要がある。みな合意でルールを決めること、みな平等にルールに従うこと、ルールに従わないとゲームが成立しないので、違反したときには罰を科すことがあること、等々です。

つまりルールのもとでのプレイヤーの平等(対等)ということが前提で、これが守られなければ、ゲーム自体が成り立たない。だから各人がこの原則を守ろうという意志をもつ。そんなことをそれは意識はしていなくても、ゲームをするときには、そういう原則が必ず成立している。この原則を守らない人がいると、もうゲームは成り立たないのです。

こう考えると、近代社会以前の社会はどんな社会だったのかということも見えてくる。それはひとこと言つて、「普遍闘争」の社会、そして「普遍支配」の社会です。ホブズという哲学者はそれを「万人の万人に対する戦争」と呼びました。

中国や日本の戦国時代を思い出してください。ある一定の地域に、強力な権力が打ちたてられないと、そこは戦乱状態になってしまいます。戦国大名や三國志の時代です。その結果はどうなるか。あちこちで戦いがあり、弱い者は打ち負かされ、だんだん少数の強者が生き残り、最後の決戦があつて、覇者がきまります。それが徳川家康だったり、秦の始皇帝だったりするわけです。

いたるところで戦争が続き、最後の覇者が決まると、ようやくその国の戦乱が収つて統治がなり立ち、チンギスが定まります。世の中は平和になる。しかし大きな問題がある。ここでは、チンギスは、最後の勝利者の圧倒的な武力(実力)で支えられている。つまり、支配階級と被支配階級が力すくで固定され、そのことでチンギスが作り上げられているのです。

[ C ]、近代以前の社会の根本のしくみは、はじめに「ケンカ」がある。勝負がついたら、一番強いものが、すべてのルールを決め、全員がそれに従う。つまり「実力の絶対支配の社会」です。ヘラクレイトスという人は、「戦いだけが世の中のチンギスを決めることができる」と言いましたが、その通りです。そしてもっと驚くべきことがある。

じつは人間社会が、農耕や定住によつて、食料のストックをもてるようになったのは、約一万年前で(語説あり)。それまではその日暮らして。そして、戦争状態は、それ以前にはほとんどなかった。ルソーも、財のチクセキのないところでは、戦争の理由がないはずだ、と言っている。

つまり、約一万年前に財のチクセキが可能になつていたら、人間社会は、つねに実力の闘争を延々続けてきた。われわれがよく知っている典型的な戦争国家は、アッシリア、ペルシャ帝国などです。いつたん大きくなつたら、とにかく辺りの国を全部攻め滅ぼし、隷属させ、完全に支配する。テリトリーのうち回りの覇を手当りしたいに食べ尽くす、ジャングルの中の虎と似ています。

ともあれ、重要なのは、人間社会は、つい二百年少しはど前に近代国家が成立するまで、この「実力支配の社会」しか存在しなかった、ということです。つまり、近代社会は、はじめて、「 I 」という仕組みとして、登場したのです。

だから、もう一度言うと、近代社会のいちばん中心の原則は、だれもが自由で平等であることを誰かが（神や、政府や、その他）が認めている、というのではなく、社会の成員がそれを「相互承認」する意志をもつ、という仕組みにあるということです。哲学ではこれを「自由の相互承認」と言います。

このことがよく理解できると、まさしくこの大原則から、近代社会のいろんな派生的な原則が現れていることがよくわかります。

（竹田晋嗣著『中学生からの哲学「超」入門 自分の意志を持つということ』による）

（注）※1 王侯——王と諸侯。

※2 普遍——すべてのものにあてはまること。

※3 ホッブズ——イギリスの哲学者。

※4 ヘラクレイトス——古代ギリシヤの哲学者。

※5 ルソー——フランスの思想家・作家。

問一 ——線①(オ)のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで記せ。

問二 ——線①「ない」について次の問に答えよ。

1、品詞名を漢字で答えよ。

2、——線①「ない」と意味・用法の同じものを、本文中~~~~線④③の中から一つ選び、記号で答えよ。

問三 A、C にあてはまるものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。（同じものを二度使用しないこと。）

ア しかし イ なせなら ウ また エ 要するに

問四 ——線②・⑦の意味としてふさわしいものを、それぞれ後のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

②「流動性」ア 規則正しく流れていく性質。

イ 一定しない流れで動く性質。

ウ 同じ場所を行ったり来たりする性質。

エ 一方方向に勢いよく流れていく性質。

⑦「典型的」ア 物事の大部分が共通であるさま。

イ 物事が定まっつていて変わらないさま。

ウ 手本となるような物事のさま。

エ 物事の特徴、性質などをよく表しているさま。

問五 ——線③「そういう違い」とあるが、「大貧民ゲーム」と「昔の社会のゲーム」から社会のどのような違いを比較したのか。二つの違いが分かるように、本文中の言葉を使って説明せよ。

問六 ——線④「ゲームをすするときには、そういう原則が必ず成立している。」とあるが、「そういう原則」とはどのようなことを指すか。解答欄の「こと」に続く形で、本文中から二十五字以内で抜き出して答えよ。

問七 ——線⑤「近代以前の社会の根本のしくみ」を端的に表している言葉を、本文中から十字で抜き出して答えよ。

問八 ——線⑥「戦争状態は、それ以前にはほとんどなかった。」とあるが、なぜ戦争が起こるようになったのか。本文中の言葉を使って二十五字以内で説明せよ。

問九 ——線⑧「ジャングルの中の虎」とはどのようなことをたとえた言葉か。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ゲームで負けたくないで、力のある人が自分でルールを決めて従わせること。

イ 食料のストックをもてるようになったので、手当たり次第に戦争を行うようになったこと。

ウ 決戦の覇者が、いくつかの国を統治し、周囲の国々と友好関係を築いていくこと。

エ 力のある大きな国が、周囲の国を全部攻め滅ぼして、完全に支配下にすること。

問十 (一)には「近代社会」を表す内容の言葉が入る。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「王様が作ったルールによる一方的なゲーム」
- イ 「皆で選んだ権力者が作ったルールによるゲーム」
- ウ 「全員で作ったルールによる対等なゲーム」
- エ 「階級別で作ったルールによる平等なゲーム」

問十一 この文章の内容として正しいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 木賃民ゲームと社会の類似点は、貧民も努力したいでお金持ちになれるという点であり、昔の王侯社会から続く仕組みである。
- イ 人間社会はつねに実力の闘争を続けていたが、相手を承認する意志があるかを支配者が確認することで社会が変化していく仕組みである。
- ウ 近代社会は誰か特別な人が認めるのではなく、一人ひとりが自由で平等であることを承認する意志を持つ社会の仕組みである。
- エ 近代以前の社会は国と国が戦い合うことで、社会の成員が規則正しいチンジョを作り上げ、社会全体が相互承認を持つという仕組みである。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(※問題中の字数制限は、すべて句読点・記号等も一字とする。)

小十郎は熊捕りをして生活をしている猟師である。小十郎は、自分が四十歳の時に妻と息子を赤痢で失った。今は九十歳の母と、五人の孫と一緒に生活をしており、生活費は小十郎一人が稼いでいる。

ある年の夏こんなようなおかしなことが起つたのだ。

小十郎が谷をばちやばちや歩つて一つの岩にのぼつたらいきなりすぐ前の木に大きな熊が蜘蛛のようになせなかを吊くしてよじ登っているのを見た。小十郎はすぐ鉄砲をつきつけた。犬はもう大慌びで木の下に行つて木のまわりを列しく馳せめぐつた。

すると樹の上の熊はしばらくの間おりて小十郎に飛びかかろうかそのまま射たれてやろうかシアンしているらしかつたがいきなり阿手を樹からはなして [A] 落ちて来たのだ。小十郎はユダウなく銃を構えて打つばかりにして近寄つて行つたら熊は阿手をあげてサケんだ。

「おまえは何がほしくておれを殺すんだ。」

「あ、おれはお前の毛皮と、胆のほかになんにもいらぬ。それも町へ持つて行つてひどく高く売れると云うのではないしほんとに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを云われるともうおれなどは何か粟かしたのみでも食つていてそれで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ。」

「もう二年ばかり待つて呉れ、おれも死ぬのはもうかまわないようなもんだけれども少しし残した仕事もあるした二年だけ待つてくれ。二年目にはおれもおまえの家の前でちゃんと死んでいてやるから。毛皮も胃袋もやつてしまうから。」

小十郎は変な気がしてじつと考へて立つてしまいました。熊はそのひまに足うらを全体地面につけて [B] 歩き出した。小十郎はやっぱり [C] 立つていた。熊はもう小十郎がいきなりうしろから鉄砲を射つたり決してしないことがよくわかつてるという風でうしろも見ないでゆつくりゆつくり歩いて行つた。そしてその広い赤黒いせなか木木の枝の間から落ちた日光にちらつと光つたとき小十郎は、う、うとせつなそうになつて谷をわたつて罅りはじめた。それから丁度二年目だつたがある朝小十郎があんまり風が烈しくて木もかきねも倒れたらうと思つて外へ出たらひのきのかきねはいつもいかにわりなくその下のところは始終見たことのある赤黒いものが横になつていたのでした。丁度二年目だしあの熊がやつて来るかと少し心配するようになっていたときでしたから小十郎は [D] してしまいました。そばに寄つて見ましたらちゃんとあのこの前の熊が口からいつぱいに血を吐いて倒れていた。小十郎は思わず押むよになつた。

一月のある日のことだつた。小十郎は朝うちを出るときいまままで云つたことのないことを云つた。

「婆さま、おれも年老つたではな、今朝まず生れで始めて水へ入るの癖したよな気がするじや。」

すると縁側の日なたで米を紡いでいた九十になる小十郎の母はその見えないうつむをあげてちよつと小十郎を見て何か笑うか

泣くかするよくな顔つきをした。小十郎はわらじを繕つくろてうんとこごとと立ちあがって出かけた。子供らはかわるがわる蔵くらの前から顔を出して「爺さん、早くお出や。」と云つて笑つた。小十郎はまづ暮なるつるした空を見あげてそれから孫たちの方を向いて「行つて来るじやい。」と云つた。

小十郎はまづ白な堅かた雪ゆきの土を白沢の方へのぼつて行つた。

犬はもう息をはあはあし赤い舌を出しながら走つてはとまり走つてはとまりして行つた。間もなく小十郎の影は丘の向うへ沈んで見えなくなつてしまい子供らは神の聲こゑでふじつきをして避んだ。

小十郎は白沢の岸を溯のぼつて行つた。水はまづ青に濁にごりなつたり禰ね子こ板いたをしたように凍つたりつららが何本も何本もじゆずのようになつてかかつたりそして河岸からは赤と黄いろのまゆみの実が花が咲いたようにのぞいたりした。小十郎は自分と木の影かげ法師ほうしがちらちら光り輝きらの幹この影かげといつしよに雪にかつきり藍あゐいろの影かげになつてうごくのを見ながら溯つて行つた。

白沢から峯たかねを一つ越えたとこに正ただの大きなやつが棲すまんでいたのを夏のうちにだすねて置いたのだ。

小十郎は谷に入つて来る小さな支漕しせうを五つ越えて何べんも何べんも右から左から右へ水をわたつて溯つて行つた。そこに小さな滝があつた。小十郎はその滝のすぐ下から長根の方へかけてのぼりはじめた。雪はあんまりまはやくて燃えているくらい小十郎は眼がすっかり紫の眼鏡めがねをかけたような気がして登つて行つた。犬はやつぱりそんな崖たけでも負けないという様ようにだびだび滑りそうになりながら雪にかじりついて登つたのだ。やつと崖たけを登りきつたらそこはまはりに栗くりの木の生えだくゆるいシヤメンの平ひららで雪はまるで寒水石さみづいしという風にキラキラ光つていたしまわりをすうつと高い雪のみねがによきよきつたつていた。小十郎がその頂上いただきでやすんでいたときだいきなり犬が「Ⅰ」のついたように咆わうへ出した。小十郎がびつくりしてうしろを見たらあの夏なつに「Ⅱ」をつけて置いた大きな熊くまが両足りょうあしで立たつてこつちへかかつて来たのだ。

小十郎は「Ⅱ」足をふんはつて鉄砲てつぱうを構かまえた。熊くまは樺かのような両手りょうてをびつこにあげてまづすぐに走つて来た。さすがの小十郎もちよつと顔かほいらを萎しぼめた。

びしゃというように鉄砲てつぱうの音が小十郎に聞きえた。ところが熊くまは少しも倒たふれないで風かぜのように卑ひくゆらいでやつて来たようだった。犬がその足もとに噛かみ付ついた。と思うと小十郎はがあとと頭かぶが鳴なつてまわりがいちめんまづ青あおになつた。それから遠くで嘶う云んことばを聞きいた。

「おお小十郎おまえを殺ころすつもりはなかつた。」

もうおれは死んだと小十郎は思おもつた。そしてちらちらちら青あおい星ほしのような光ひかりがそこらにゆめに見えた。

「これが死んだるしだ。死ぬとき見る火ひだ。熊くまは、ゆるせよ。」と小十郎は思おもつた。それからあとの小十郎の心持こころもちはもう私わたしにはわからない。

とにかくそれから三日目の晩ばんだつた。まるで氷こおりの玉たまのような月つきがそらにかかつていた。雪ゆきは青白あざわかく明るく水みづは燐光りんこうをあげた。すばるや参さんの星ほしが緑きぬや橙たちにちらちらして呼吸こそをするように見えた。

その栗くりの木と白い雪ゆきの峯たかね々々にかこまれた山やまの上うへの平ひららに黒くろい大きなものがたくさん環わんになつて集あつて各々黒くろい影かげを置き回まわつた。教徒きやうとの祈いのちるときのようにじつと雪ゆきにひれふしたまもいつまでもいつまでも動うごかなかつた。そしてその雪ゆきと月のあかりで見るといちはん高いところに小十郎の死し體たいが半分座ざつたようになつて置おかれていた。

思いなしかその死しんで凍こえてしまつた小十郎の顔かほはまるで生きてるときのようにびえびえして何なにか笑わらつていようになつて見えたのだ。ほんとうにそれらの大きな黒くろいものは参さんの星ほしが天あまのまん中に来きてもつと西にしへ傾かたいてもじつと化石かししたようにうごかなかつた。

(注) 参さんの星ほし——オリアン座ざの中央ちゆうおうの三連星さんれんせいによる)

(注) ※1 したのみ——とんぐり。

※2 寒水石——石灰岩せっかいがんの一種。

※3 燐光——燐りんが空くう中で酸化さくわするとき発はつする青白あざわかい光。

※4 すばる——おうし座ざにある散開星団さんかいせいだん。

※5 参さんの星ほし——オリアン座ざの中央ちゆうおうの三連星さんれんせい。

※6 回々教徒——イスラム教徒きやうとの異称いせう。

問一 ——線せん(ア)(イ)のカタカナは漢字かんじに直ただし、漢字かんじは読みをひらがなで記せ。

問二 〔A〕―〔E〕にあてはまるものを次のア～オの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。(同じものを二度使用しないこと。)

ア 落ちついて イ ぼんやり ウ ゆつくりと エ どたりと オ ときごと

問三 〰〰〰線④～⑥の品詞名を次のア～コの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。(同じものを何度使用してもよい。)

ア 動詞 イ 形容詞 ウ 形容動詞 エ 名詞 オ 副詞 カ 連体詞 キ 接續詞  
ク 感動詞 ケ 助動詞 コ 助詞

問四 〰線①「憂な気がして」とあるが、小十郎がそのように思ったのはなぜか。本文中の言葉を使って説明せよ。

問五 〰線②「拜むようにした。」について次の問に答えよ。

1、小十郎が「拜むようにした。」のはなぜか。適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア この前の熊が約束を守って死んでくれただけでなく、小十郎が銃で撃つことのない死に方を熊が選んでくれたことに感謝しているから。

イ この前会った熊が約束を守って死んでしまったことで、他の熊が攻めてくるのではないかと思い、きちんと申おうとしているから。

ウ この前の熊が山の中ではなく自分の家の前で死んでいたのもうこれ以上熊が家の前で死なないように願っているから。

エ この前の熊が口からいっぱいに血を吐いて倒れているを見て、いつもの山の中の状況と違って直視することができなかったから。

2、「拜むようにした。」と同じような様子を表す部分を、これ以降の本文中から二十字以内で抜き出し、その初めと終わりの五字をそれぞれ答えよ。

問六 〔Ⅰ〕・〔Ⅱ〕に入る語をそれぞれ漢字一字で答えよ。

問七 〰線③「まるで氷の玉のような月」に含まれる表現技法を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 擬人法 イ 倒置法 ウ 隠喩法 エ 直喩法 オ 反復法

問八 〰線④「笑っているようにさへ見えた」とあるが、その理由を考えて小十郎の気持ちをも説明せよ。

問九 〰線⑤「それらの大きな黒いもの」とは何を指すか。本文中から抜き出して答えよ。

問十 この物語の作者である宮沢賢治の作品を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア『高瀬舟』 イ『夜明け前』 ウ『銀河鉄道の夜』 エ『一握の砂』 オ『吾輩は猫である』

【三】 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(※問題中の字数制限は、すべて句読点・記号等も一字とする。)

昔、<sup>①</sup>天竺の人、宝を買はんために、<sup>②</sup>銀五十貫を手に持たせてやる。大きな川の端を行くに、舟に乗りたる人あり。舟の方を見れば、舟より<sup>③</sup>龜、首をさし出したり。錢持ちたる人立ち止りて、この龜をば、「何の料ぞ」と問へば、「殺して物にせんずる」といふ。「その龜買はん」といへば、この舟の人曰く、「<sup>④</sup>いみじき大切な事ありてまうけたる龜なれば、<sup>⑤</sup>いみじき儲なりとも売るまじきよしをいへば、<sup>⑥</sup>なほあながちに手をすりて、この五十貫の錢にて龜を買ひ取りて放ちつ。

心に<sup>⑦</sup>思ふやう、「親の、宝買ひに隣の国へやりつる錢を、龜にかへてやみぬれば、親、いかに腹立ち給はんすらん。」ぞりとてまた、<sup>⑧</sup>親のもとへ行かであるべきにあらねば、親のもとへ帰り行くに、道に人の<sup>⑨</sup>みていふやう、「ここに<sup>⑩</sup>龜売りつる人は、この下の渡りにて舟うち返して死ぬ」と語るを聞きて、親の家に帰り行きて、錢は龜にかへつるよし語らんとする程に、親のいふやう、「何とてこの錢をば返しおこせたるぞ」と問へば、子のいふ、「<sup>⑪</sup>える事なし。その錢にては、しかにか龜にかへてゆるしつれば、そ



のよしを申さんとして参りつるなり」といへば、親のいぢやう、「黒き衣きたる人、同じやうなるが五人、おのおの十貫づつ持て来たりつる。④「これ、そなる」と見てせれば、この銭はまだ濡れながらあり。

はや、買ひて放しつる亀の、その銭川に落ち入るを見て、取り持ちて、親のもとに子の船らぬさまにやりけるなり。

(『宇治拾遺物語』による)

(注) ※1 天竺——インドの古称。

※2 銭五十貫——「貫」はお金の単位。

※3 「何の罪ぞ」——「何の非か」。

※4 まうけたる——手に入れた。

※5 価——値段。お金。

※6 あながちに——熱心に。

※7 やみぬれば——終わってしまったので、使ってしまったので。

※8 さりとして——そうだからといって。

※9 おこせたるぞ——よこしたのか。

問一 ~~~~~線③④をそれぞれ現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えよ。

問二 ~~~~~線①・②のここでの現代語訳として適当なものを後のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

①「いみじき」

ア 非常に イ なんとなく ウ めずらしく エ 急に

②「よし」

ア 良い点 イ 目的 ウ 結果 エ わけ

問三 ~~~~~線③「親のもとへ行かであるべきにあらねば」とは、「親のもとに展らすにすませるわけにはいかないの」という現代語訳になるが、「展らすにすませるわけにはいかない」のはなぜか。その理由として適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 親に頼まれた宝を買ったが、船から落としてしまったので、謝らなければならないから。

イ 親に頼まれた宝を買うための銭を落としてしまったので、買い物ができなくなってしまったから。

ウ 親に頼まれた宝を買うための銭を船から落としてしまったので、もう一度もらおうと思ったから。

エ 親に頼まれた宝を買うための銭で亀を買ってしまったので、謝らなければならないから。

問四 ~~~~~線④「これ、そなる」が指しているものを、本文中から四字で抜き出して答えよ。

問五 この文章の内容として適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 舟の人は大切に亀を育てていたが、子が五十貫の銭を出したので譲ってくれた。

イ 亀を売った舟の人は、川の下手の方で舟がひっくり返って死んでしまった。

ウ 黒い着物を着た五人がそれぞれ十貫ずつ持って、子の家に届けた。

エ 子が五十貫で買った亀たちが、川に落ちた銭を拾って親の元へ届けていた。